

## ニヴフ語における時の副動詞 (temporal converbs) について

蔡 熙鏡

(言語文化専攻 言語・情報学研究コース)

キーワード：ニヴフ語、時の副動詞、形態・統語論的な特徴

### 修士論文の目次

1. はじめに	3.3. Otaina (1978)	5.3. 上位節との意味関係
1.1. ニヴフ民族	3.4. Krejnovich (1979)	6. おわりに
<u>1.2. ニヴフ語の概要</u>	3.5. まとめ	6.1. 結論
1.3. ニヴフ語の表記について	<u>4. 研究方法</u>	6.2. 今後の課題
<u>2. 研究対象</u>	4.1. 調査資料	【謝辞】
2.1. ニヴフ語の副動詞	4.2. 分析方法	【略号一覧】
<u>3. 先行研究</u>	<u>5. 結果及び考察</u>	【調査資料】
3.1. Gruzdeva (1998)	5.1. 非人称標示副動詞	【参考文献】
3.2. Panfilov (1965)	5.2. 人称標示副動詞	【付録】 前接語の種類

\* 下線の部分が本稿でまとめた部分である。小節は一部省略した。

### 1. はじめに

修士論文では、ニヴフ語のアムール方言とサハリン方言のテキスト集の分析をもとに、ニヴフ語における時の副動詞が示す形態・統語論的、意味論的な特徴について考察を行った。本稿では、その中から主に形態・統語論的な特徴に関する部分をまとめることにする。以下では、2節でニヴフ語の概要を、3節で先行研究と研究方法を簡潔に述べる。4節で時の副動詞の形態・統語論的な特徴を示し、5節で上位節との時間的な意味関係について述べた後、6節でまとめる。本稿における例文番号、グロス、日本語訳は特に断りのない限り筆者によるものである。

### 2. ニヴフ語の概要

ニヴフ語は、ロシアのアムール川下流域とサハリン島に住んでいるニヴフ (Nivkh; 民族自称で「人間」という意味) の人々によって話されている言語である。2002年のロシアの国勢調査によれば、ニヴフ民族の人口は5,162人、その中でニヴフ語が話せる人は512人であるという。

ニヴフ語は、系統関係の不明な孤立語であり、他の系統関係の不明なシベリアや極東の言語とともに古シベリア諸語 (Paleo-siberian)、または古アジア諸語 (Paleo-asiatic) に分類されることがある。類型論的な特徴としては、SOVの基本語順、修飾部-非修飾部の順序、膠着型の形態論を示すことがあげられる。屈折や派生は接辞の付加によって実現される。

方言は、アムール川下流域とサハリン島の北部・西部で話されているアムール方言と、サハリン島のトゥミ川流域と東部・南部で話されているサハリン方言に大きく分けられる (Panfilov 1962: 1, Krejnovich 1979: 296, Gruzdeva 1998: 7, 丹菊 2008: 1-2)。

母音音素は、すべての方言が /i, e, a, o, u, ə/ の6個を持ち、子音音素は28個から33個までと方言により若干異なる (服部 1988: 1409, Gruzdeva 1998: 10, Shiraishi 2006: 24)。以下の表1はニヴフ語におけるすべての子音音素を表したものである。

表 1: ニヴフ語の子音音素

	唇音	歯音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	声門音
有気破裂音	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	c <sup>h</sup>	k <sup>h</sup>	q <sup>h</sup>	
無声/有声破裂音	p b	t d	c d <sup>j</sup>	k g	q G	
無声摩擦音	f	r <sup>h</sup>	s	x	χ	h
有声摩擦音	v	r	z	ʎ	ʁ	
鼻音	m	n	ɲ	ŋ		
側面音		l				
わたり音	w		j			

ニヴフ語の動詞<sup>1</sup> は、以下に示すような構造を持つ。

(1) (Mattissen 2003: 16)

undergoer\_prefix-root-(aspectoid/degree)-(causative)-(aspectoid/degree/temporal)-

(scalar\_operator)-(modality)-mood/scalar\_operator/focus/converb\_suffix

受動者 - 語根 - (アスペクトイド<sup>2</sup> /程度) - (使役) - (アスペクトイド/程度/テンポラル) - (焦点小辞<sup>3</sup>) - (モダリティー) - ムード/焦点小辞/焦点/副動詞接尾辞

Mattissen (2008) は、ニヴフ語の副動詞を人称表示、主語の制御、埋め込み (副動詞節の移動) の諸側面とその機能によって、i) 典型的な副動詞 (converb proper)、ii) 行為者標示副動詞、iii) 列挙 (enumerative) の3つの種類に分類している。

まず、典型的な副動詞は、行為者の人称は標示せず、主節との意味関係によってさまざまな接尾辞で現れる。副動詞節は主節とは異なる主語を持つことができる。また、副動詞節は主節の前にくることもあれば、主節の中に入ることもある。次に、行為者標示副動詞は以下の表2に示す接尾辞の一つをとる。

表 2: 行為者標示副動詞の接尾辞

	アムール方言	サハリン方言
一般的副動詞 (general converb)	-r / -t	-n / -r / -t
先行副動詞 (anterior converb)	-ror / -tot	-non / -ror / -tot

表2における /r/ を含む形式は行為者が2・3人称単数、/t/ を含む形式は行為者が1人称単数と全人称複数であることを表す。サハリン方言における /n/ を含む形式は主節動詞

<sup>1</sup> ニヴフ語の形容詞は、未来の接辞をとらないという点以外は、動詞と同じ形態論を示す (服部 1988: 1413)。つまり、ニヴフ語の動詞は性質動詞と非性質動詞に分けることができ、形容詞の語類を別に立てる必要はない。

<sup>2</sup> Mattissen (2003: 16) は、ニヴフ語に完了/未完了というアスペクトの対立はないとしている。アスペクトイド (aspectoid) の用語は、文法化の過程にある完了的、継続的、習慣的といったカテゴリーのために用いている。

<sup>3</sup> 焦点小辞は 'scalar operator' の筆者による訳である。Mattissen (2003: 11) は「これらの接尾辞は König (1991) のいう 'focus particles' のカテゴリーに当てはまるが、ここではニヴフ語の焦点接尾辞との混乱を防ぐためにこの用語を用いる」と述べている。

が未来、または命令の標識を持つのであれば用いられる。以下に例を示す。

(2) EAST SAKHALIN DIALECT (Otaina 1978: 102)

- a. *ni c<sup>h</sup>o-xu-tot p<sup>h</sup>-vo-rox vi-d<sup>i</sup>.*  
 1SG fish-kill-CVB.1SG REFL-village-DAT go-IND  
 ‘魚をとってから村に帰った’
- b. *ni c<sup>h</sup>o-xu-non p<sup>h</sup>-vo-rox vi-j-d<sup>i</sup>.*  
 1SG fish-kill-CVB.1SG REFL-village-DAT go-FUT-IND  
 ‘魚をとってから村に帰るだろう’

最後に、列挙は等位節の連鎖に用いられ、表 2 の一般的副動詞のような方法で行為者を標示する。

(3) (Panfilov 1965: 66) 文脈: 老人が罾にかかったキツネを発見して。

- cir-kir za-r<sup>h</sup> iy-ra r<sup>h</sup>o-r vi-ra,*  
 wood-INS hit-CVB.3SG kill-ENU.3S carry-CVB.3SG go-ENU.3SG  
*inar səu-ra seu-ra verax-tox imy-ra (ha-d<sup>i</sup>.)*  
 pelt take.off-ENU.3SG dry-ENU.3SG slave-DAT give-ENU.3SG (be.so-IND)  
 ‘木の棒でたたき殺して、運んで行って、皮をはがし乾かして、使用人にあげたりした’

### 3. 先行研究と研究方法

Panfilov (1965) と Otaina (1978) は、副動詞に関して、主節動詞と副動詞節が異主語を持ち得るか、どのような接辞をとるのか、主節動詞とどのような意味関係を持つかに重点を置いて分析を行っている。両方とも主にアムール方言を対象としているが、Otaina (1978) の場合は、性質動詞に限定して記述を行っている。Gruzdeva (1998: 50) は、時を表す副動詞接辞をアムール方言と東サハリン方言に分けてあげている。先行研究で扱っている主な形式の意味機能を以下の表 3 にまとめておく。

表 3: 先行研究における時の副動詞の意味機能 (アムール方言 (A)、東サハリン方言 (ES))

副動詞接辞	Gruzdeva (1998)	Panfilov (1965)	Otaina (1978)
- <i>ŋa(n)</i>	先行 (A) 先行・同時 (ES)	先行	同時
- <i>ba ~ -pa</i>	先行 (A) 先行・同時 (ES)	先行・同時	先行
- <i>ke</i>	先行 (A) 同時 (ES)	先行・同時	同時 (過去)
- <i>fke</i>	先行 (A) 先行・同時 (ES)	先行・同時	先行 (過去)
- <i>ge</i>	先行・同時 (A) 同時 (ES)	—	先行
- <i>data(r) / -data(t)</i>	同時	同時	同時
- <i>durŋu(r) / -durŋu(t)</i>	同時 (A)	同時	同時
- <i>ivo</i>	同時	同時	同時
- <i>ənke ~ -anke</i>	後行	—	—
- <i>ror / -tot / -non</i>	先行	先行	先行

本稿では、先行研究であげられている形式をテキスト集から収集し、分析を行った。動詞を分類する際には、Otaina (1978) に従い、性質動詞と非性質動詞に分類した。調査には、アムール方言のテキスト集である Shiraishi (2002, 2003, 2004, 2007, 2008, 2009)、Puxta (2002) とサハリン方言のテキスト集である丹菊・パクリナ (2008) の計 8 冊を用いた。調査資料から得られた用例を次の表 4 に示す。

表 4: 資料から得られた時の副動詞

副動詞接辞	Shiraishi (2002 他)・Puxta (2002) アムール方言	丹菊・パクリナ (2008) サハリン方言
<i>-ŋan(A)/-ŋa~-ŋə(S)</i>	539	134
<i>-tot/-ror/-non</i>	191	53
<i>-ba ~ -pa</i>	173	23
<i>-ke</i>	97	0
<i>-ge</i>	33	0
<i>-fke</i>	1	20
<i>-data</i>	1	25
<i>-bra</i>	0	5
<i>-vuye</i>	0	2
合計	1035	262

次節では、先行研究を踏まえて、主に次の 2 点について述べることにする。まず、Panfilov (1965) によれば、*-ke* は名詞に付いて副詞を形成することがあると述べていたが、他の形式の場合はどうだろうか。次に、表 3 に見るように、時の副動詞接辞の意味機能に関する記述に差がみられるが、それはなぜかという点である。

#### 4. 時の副動詞の形態・統語論的な特徴

##### 4.1. *-ŋan*

*-ŋan* は、時の副動詞の中で一番多く用いられている。性質動詞、非性質動詞に接尾されている例が確認できる。さらに、名詞や疑問代名詞に付いている例が見られる。

(4) (Shiraishi 2009: 15)

a. *pila-nivy-ŋan*

adult-human-CVB

‘大人の人になった時’

(Shiraishi 2002: 10)

b. *nivy-mu-ŋan*

human-become-CVB

‘(熊から) 人間になった時’

(5) (Puxta 2002: 49)

*jago-ŋan oxt-als*

what-CVB medicinal-berry

‘時には薬用イチゴともいう’

*q<sup>h</sup>au-ra*

call-ENU.3SG

*ha-d<sup>i</sup>-ra.*

do.so-IND-HILI

(4a) は、名詞の後に *-ŋan* が直接後接されている例である ((4b) と比較)。それ以外にも、*parf* 「夕方」に後接している例が 1 例、*park* 「一人」に後接している例が 2 例で、計 4 例が

名詞に後接している。疑問代名詞 *jayo-*「どの」に後接されていたのは 2 例であった。これらの例は *-ŋan* の統語的な資格を論じる上で極めて重要であると思われる。Savel'eva, V. i C. Taksami (1970) には、次のような例がある。

(6) (S/T 1970: 494)

*cʰəŋ jayo-bityə-gu uru-dʰ-ŋa?*  
 2PL what-book-PL read-IND-Q  
 ‘あなたたちはどのような本を読みましたか?’

上記の例を見ると分かるように、疑問代名詞 *jayo-*「どの」は、名詞 *bityə*「本」を限定する役割を果たしている。この事実から疑問代名詞の限定を受ける *-ŋan* は名詞の特徴を一部持っていると考えられる。しかしながら、単独で用いられている例が見られないことや格接辞が付かないなど、その名詞としての地位は不完全であると思われる。サハリン方言の場合は、上記のような例は見られず、性質動詞、非性質動詞に接尾されて現れる。

Panfilov (1965: 140) は、副動詞にテンスは標示されないと述べているのに対し、Mattissen (2008: 96) は、テンスも副動詞に標示されうると述べており、両者の記述は異なっている。本稿の調査では、(7) に見るように、アムール方言からテンスが標示されている例が確認され、Mattissen (2008: 96) の記述を支持する結果となった。

(7) (Shiraishi 2002: 8)

*ni cʰxəf mu-t va-nə-ŋan,*  
 1SG bear change-CVB.1SG fight-FUT-CVB  
 ‘私がクマに変身して戦うとき’

#### 4.2. *-ba ~ -pa*

接尾されている動詞の種類を見ると、アムール方言で得られた *tʰans-*「すばやい」の一例を除き、すべて非性質動詞である。さらに、単独で副詞の役割を果たしている例が見られる。

(8) (丹菊・パクリナ 2008: 9)

*qan-girʰ tʰas-toχ pa vi-jnə-d-lu.*  
 dog-INS somewhere-DAT soon go-INT-IND-Q  
 ‘犬ぞりでどこへすぐ行こうとしたのか’

(8) のような例は、サハリン方言でのみ確認された。さらに、サハリン方言では、(9a,b) に見るように、他の副動詞接辞の後に続く例が見られる。アムール方言では、*-ŋan* と同じくテンスが標示される例が現れている (例 (9c))。

- (9) a. (丹菊・パクリナ 2008: 32)      b. (丹菊・パクリナ 2008: 12)
- p<sup>h</sup>ə-data-pa*                                      *ha-ŋa-pa*  
 come-CVB-CVB                                      do.so-CVB-CVB  
 ‘来るとすぐに’                                      ‘するとすぐに’
- c. (Shiraishi 2009: 25)
- hurtiv-t      nana   c<sup>h</sup>aj   ra-nə-ba      himi      jama-pa,*  
 sit-CVB.1SG   just   tea   drink-FUT-CVB   upward   look-CVB  
 ‘座って、ちよūdお茶を飲もうとしていたとき、上の方を見ると’

#### 4.3. -ke

-ke の形式は、アムール方言でのみ用いられており、性質動詞、非性質動詞に接尾されて現れる。以下にそれぞれの例を示す。

- (10) a. (Shiraishi 2008: 48)                                      b. (Shiraishi 2009: 34)
- ni      mackii-ke   idə-c.*                                      *vi-ke   c<sup>h</sup>əf   ərk      p<sup>h</sup>ur-ra.*  
 1SG   little-CVB   see-IND                                      go-CVB   bear   already   go.out-ENU.3SG  
 ‘私は小さい時に見た’                                      ‘行ったときには、熊はもういなかった’

Panfilov (1965: 143) は、-ke が名詞と結合して副詞を形成することがあることを指摘していたが、今回の調査ではそのような例は見られなかった。

#### 4.4. -fke

-fke は、ほとんどサハリン方言で見出された。アムール方言では ha-「そうである」の語幹に付いて現れた 1 例のみ確認できた。以下の (11) は、指示代名詞に後接している例である。

- (11) (丹菊・パクリナ 2008: 38)
- i      rulku-r<sup>h</sup>      tu-fke      ətəta   taf      malʁo-bra.*  
 river   pass-CVB.3SG   this-CVB   INTJ   house   many-CVB  
 ‘川を通って行くと、その時おやおや家がたくさんあった’

ニヴフ語の指示代名詞は対象指示語根と名詞化接辞 (アムール方言では -d、サハリン方言では -d/-nd/-nt) によって形成され、代名詞的なふるまいをみせる。この形式には数と格 (例 (12a)) が標示されることがあり、名詞化接辞なしに用いられた場合は、連体修飾の機能 (例 (12b)) を果たす (Gruzdeva 1998: 27, Mattissen 2003: 14)。

(12) (Gruzdeva 1998: 27)

a. <i>tə-di-yir</i>	b. <i>ni</i>	<i>tə-urk</i>	<i>vi-nə-di-ra.</i>
this-NMLZ-INS	1SG	this-night	go-FUT-IND-HILI
‘これで’		‘私は今夜行くのだ’	

つまり、(11) の *-fke* は、指示代名詞の連体修飾を受けており、名詞の統語的な特徴を持っているということが分かる。しかしながら、*-fke* も *-ŋan* と同じく、単独で現れることはない。また、*-fke* が接尾されている動詞はすべて非性質動詞で、動詞語幹に直接つながっている。

#### 4.5. *-ge*

*-ge* は、アムール方言でのみ現れている。用例を見ると *hoŋ-ge* 「こうして」が 31 例、*ha-ge* 「そして」と *hoqejr<sup>h</sup>um-ge* 「こうして」が、それぞれ 1 例ずつ現れている。すべての例が接続詞として用いられている。

(13) (Shiraishi 2003: 9)

<i>hoŋ-ge,</i>	<i>par<sup>h</sup>k</i>	<i>p<sup>h</sup>eyzdox</i>	<i>q<sup>h</sup>ola-di-yu</i>
so-CVB	oneself	thus	become.rich-IND-PL
‘こうして、彼ら自身はお金持ちになった’			

すべての例が接続詞として用いられていることから考えると、*-ge* の生産性はもはや失われている可能性がある。

#### 4.6. *-data*

*-data* は、1 例を除き、サハリン方言で用いられている。性質動詞、非性質動詞、指示代名詞<sup>4</sup> に接尾されて現れている。以下に指示代名詞に後接されている例を示す。

(14) (丹菊・パクリナ 2008: 44)

<i>nan-data</i>	<i>hun-k<sup>h</sup>utə-roχ</i>	<i>p<sup>h</sup>r<sup>h</sup>ə-t,</i>
that-CVB	that-hole-DAT	come-CVB.1SG
‘その間、あの穴まで来て’		

Krejnovich (1979: 320) は、*-data* について、アムール方言では副動詞を形成することはないとしているが、今回の調査で 1 例ではあったが、副動詞として用いられている例が見られる。

<sup>4</sup> 高橋 (1942: 39) に、*nan-d* 「その」の形式がある。

(15) (Shiraishi 2008: 56)

*imyu mor<sup>h</sup>qa-tata imyu p<sup>h</sup>r<sup>h</sup>ə-t imyu ye-t.*  
 3PL live-CVB 3PL come-CVB.3PL 3PL take-CVB.3PL  
 ‘彼らが住んでいる時に、彼らが来て連れて行った’

さらに、Panfilov (1965: 145) は「-*datar* / -*datat* は、無声閉鎖音で終わる動詞語幹の後では -*tatar* / -*tatat* になる」と述べているが、(15) に見るようにその規則も守られていない。

#### 4.7. -*bra* / -*vuye*

-*bra* と -*vuye* は、両方ともサハリン方言でのみ見られ、すべての例は性質動詞と非性質動詞の語幹に直接つながっている。

-*bra* は、以下に示すように等位節の連鎖に用いられることがあり、Mattissen (2008) のいう列挙の形式に類似している (例 (3) を参照)。

(16) (丹菊・パクリナ 2008: 13)

*p<sup>h</sup>roksk əjk kə-bra əjk ciy-bra.*  
 suddenly INTJ rain-CVB INTJ thunder-CVB  
 ‘突然、ああ！雨が降って、ああ！雷が鳴って’

#### 4.8. -*tot* / -*ror*

-*tot* / -*ror* は、すべて非性質動詞に用いられている。1 例ではあったが、以下に示すように -*tot* / -*ror* の後に一般的副動詞接辞 (表 2 を参照) が続く例が見られる。

(17) (Shiraishi 2003: 12)

*imyu ŋəc-x tov-ror-r<sup>h</sup> imyu-ax pəj-r vi-ku-r<sup>h</sup>.*  
 3PL leg-LOC tie-CVB.3SG-CVB.3SG 3PL-CAUSEE fly.away-3SG go-CAUS-CVB.3SG  
 ‘(おばあさんは) 小鳥たちの足に (リボンを) つけてから、飛ばしてあげた’

(17) は、先行副動詞と一般的副動詞が連続している例であるが、両方とも行為者の人称を標示する接辞であるという点で、ニヴフ語においては極めて特殊である。

### 5. 上位節との時間的な意味関係

表 3 に示してあるように、一部の形式において、副動詞節と上位節との時間的な意味関係に関する記述に違いが見られる。ここでは、-*ŋan* の形式をとりあげて、何故このような差が見られるのかについて考察を行う。

本稿の調査では、-*ŋan* が性質動詞に後接している場合は、すべて同時の意味に解釈される。これは Otaina (1978) の記述に一致する。一方、非性質動詞に後接する場合は、以下の例に示すように上位節に先行する出来事 (例 (18a))、同時に起こる出来事 (例 (18b))、両方を表すことができる。

(18) a. (丹菊・パクリナ 2008: 43)

*ni qar-ŋa p<sup>h</sup>r<sup>h</sup>ə-d-yun.*  
1SG stop-CVB come-IND-PL

‘私が止まった時に彼らがやって来た’

b. (丹菊・パクリナ 2008: 44)

*c<sup>h</sup>amŋ lu-ŋa ni kuz-t,*  
shaman sing-CVB 1SG go.out-CVB.1SG

‘シャーマンが歌うときに、私は外へ出た’

上記の例がそれぞれ先行と同時に解釈される理由は、動詞が持つ語彙的なアスペクトの違いからくるものと筆者は考える。(18a) の *qar-*「止まる」は、瞬間的な動作を表している一方、(18b) の *lu-*「歌う」はある程度続く動作を表している。上位節の動詞を見ると、*p<sup>h</sup>r<sup>h</sup>ə-*「来る」と *kuz-*「出る」で両方とも瞬間的な動作を表している。<sup>5</sup>

このように *-ŋan* の解釈は、接尾されている動詞の意味に依存しているといえることができる。

## 6. まとめ

Otaina (1978) は、本稿で調査対象としたすべての副動詞接辞は、性質動詞と非性質動詞の両方に用いることができると述べている。しかし、結果を見ると、*-fke* と *-tot / -ror* は、すべて非性質動詞に接尾されていて、*-ba ~ -pa* の場合は、1例を除いて非性質動詞とともに用いられている。

Panfilov (1965: 143) は、*-ke* が名詞と結合して副詞を形成することがあると指摘している。本稿の調査では、*-ŋan* が名詞、疑問代名詞に後接している例、*-fke* と *-data* が指示代名詞に後接している例が確認された。さらに、*-ba ~ -pa* の場合は、単独で用いられて副詞のようにふるまう例も見られる。この事実は、これらの形式を副動詞接辞として扱ってきた従来の研究では説明することが難しいと思われる。この問題に関しては、今後さらなる調査と研究を重ねていく必要がある。

<sup>5</sup> 金田一 (1993[1976]: 11) は、「来る」「行く」「入る」「出る」「上る」「下る」などの動詞について、運動の途中をも表し得るし、到着の瞬間をも表し得るとし、前者を継続動詞、後者を瞬間動詞と呼んでいる。

略号一覧

1	first person	1 人称	IND	indicative	直説法
2	second person	2 人称	INS	instrumental	具格
3	third person	3 人称	INT	intentional	意図
CAUS	causative	使役	INTJ	interjection	間投詞
CAUSEE	causee	被使役者	LOC	locative	所格
CVB	converb	副動詞	NMLZ	nominalizer	名詞化
DAT	dative	与格	PL	plural	複数
ENU	enumerative	列举	Q	question particle	疑問小詞
FUT	future	未来	REFL	reflexive	再帰
HILI	highlighting focus	強調の焦点	SG	singular	単数

参考文献

- 金田一春彦 (1993[1976]) 『日本語動詞のアスペクト』 東京: むぎ書房.
- 丹菊逸治 (2008) 『アジア・アフリカ基礎語彙集 51 ニヴフ語サハリン方言基礎語彙集 (ノグリキ周辺地域)』 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 服部健 (1988) 「ギリヤーク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『三省堂言語学大辞典』 1, pp. 1408-1414. 東京: 三省堂.
- Gruzdeva, E. (1998) *Nivkh*. München: Lincom Europa.
- Krejnovich, E. (1979) Nivkhsii iazyk [The Nivkh language]. *Iaziki azii i afriki* 3, pp. 295-329. Moscow: Nauka.
- Mattissen, J. (2003) *Dependent-Head Synthesis in Nivkh: A Contribution to A Typology of Polysynthesis*. Amsterdam: John Benjamins.
- \_\_\_\_\_ (2008) Converbs in Nivkh. In Karen H. Ebert, Johanna Mattissen, Rafael Suter, *From Siberia to Ethiopia : converbs from a cross-linguistic perspective* Zürich : Universität Zürich.
- Otaina, G. (1978) *Kachestvennye glagoly v nivkhskom iazyke* [Nivkh verbs denoting quality and property]. Moscow: Nauka.
- Panfilov, V. (1962) *Grammatika nivkhskogo iazyka* [Nivkh grammar] 1. Moscow and Leningrad: Nauka.
- \_\_\_\_\_ (1965) *Grammatika nivkhskogo iazyka* [Nivkh grammar] 2. Moscow and Leningrad: Nauka.
- Savel'eva, V. and C. Taksami. (1970) *Nivkhsko-russkii slovar'* [Nivkh-Russian dictionary]. Moscow: Sovetskaia enciklopediia.
- Shiraishi, H. (2006) *Topics in Nivkh Phonology*. Ph.D. thesis, Groningen: University of Groningen.